

春の散策会(散策地／吉良邸跡、回向院他)に向けて
話題提供(続き)：吉良邸討ち入りの決断とその後の道のり

第 17 回卒：圓山壽和(川越初雁会・藤沢周平読書サロン/進行役兼事務局)

1. はじめに

「川越初雁会」のホームページの活性化も兼ね、先日、この春(6月5日予定)の川越初雁会主催の散策会(散策地／吉良邸跡、回向院他)へ向けての話題提供を寄稿させてもらった。

岩堀・川越初雁会会長や加島・当会事務局長のPR／働き掛けもあってか、数人の方が小生の寄稿文に目を通していただけたようで感謝している。

「赤穂藩の解体時のことなどなかなか面白かったよ。」「300名程いた藩士のうち討ち入りにまで至ったものは47人と少なかったのだな。」「金銭面から討ち入り事件を見るのは新鮮さがある。」などの感想を耳にし、それなりに話題提供できたことを喜んでいる。

今回の寄稿内容は前回同様、山本博文氏の著作「忠臣蔵の決算書」(新潮新書、2012年発行)、「これが本当の忠臣蔵」(小学館新書、2012年発行)、及び「赤穂事件と46士」(敗者の日本史15／吉川弘文館、2013年発行)から引用したものである。端的に言えば小生自身がこれらの本を読んで、「なる程そういうことだったのか、これは面白い。」と思った事項／箇所を紹介したものであることを先ず記しておきたい。

当ホームページの編集者・沢田正さん(第17回卒)は、毎月、表紙の写真を入れ替えるなど、一人でも多く当ホームページを覗きに来る人を増やしたいとの方針を持っている。小生も及ばずながらその趣旨に賛同し、ホームページの賑わかしの一環として前回の話題提供の続きの分を再度寄稿させてもらった次第である。

一応前回の続きの形をとっているが、基本的には小生の関心事を脈略なしに列記した話題提供である。

なお、浅野内匠頭は殿中での刃傷後、即日切腹を命じられた時、35歳であったが、今回の話題提供では、大石内蔵助以下、登場する赤穂浪士についてもその年齢(討ち入り事件後の切腹した元禄16年2月4日時点)を書き加えてみた。より実感的に当該人物を捉えられればとの思いである。

2. 吉良邸討ち入りへ向けての過程／乗り越えていった事柄

(1) 京都・円山会議での討ち入り決定から同志の江戸下向

浅野内匠頭の弟・浅野大学の「松平安芸守(広島藩主浅野綱長)へのお預け」処分が元禄15年7月18日になされ、浅野大学を当主としてのお家再興は不可能となった。

江戸に逗留していた吉田忠左衛門(63歳)は、この情報を京都にいる実弟の貝賀弥左衛門(54歳)に飛脚便で送った。この知らせは7月22日に貝賀のもとに着き、すぐに京都・山科の大石内蔵助(45歳)に知らされた。そして上方では、7月28日、京都・円山の安養寺の塔頭(たっちゅう)の重阿弥(ちょうあみ)という宿坊を借りて今後の対策会議を開いた。

そこには上方の同志を説得して、分派を作っても討ち入りを一日も早く挙行しようとしていた堀部安兵衛(34歳)も上方にいて参加した。一方、上級藩士でもある上方の幹部グループ(奥野将監(55歳)／元番頭・進藤源四郎(55歳)／元足軽頭・小山源五右衛門(54歳)／元足軽頭ら)は、江戸下向時の関所での浪人改めや江戸の吉良邸の警備の厳しさなどの風説を取り上げ、この時期の風聞や用心が静まった来春での江戸下向を言い出し、同志の間に分裂が始まった。

このため大石も一旦は「頭立ちたるものが脱盟するのは残念」とのことで、使者として潮田又之丞(35歳)を江戸に遣わし、同志に討ち入り延引の相談を持ちかけた。それに対し、江戸の同志は浅草で終日相談し、奥野らの考えは論外だということになり、相談結果の報告のため、潮田又之丞の上方への帰路に近松勘六(34歳)を同道させた。

また、上方と江戸の同志の意思疎通、特に急進派の多い江戸方の抑えとして、この年の3月

からに江戸に送り込まれていた吉田忠左衛門は、堀部弥兵衛(77歳、元留守居役／江戸詰めの外交役で堀部安兵衛の義父)らと連名で、大石に手紙を送っている。

「仰せ下された趣は、御尤もと存じます。しかし、私どもも老人ですので、来春まで生きていられるかどうか分かりません。もし、この度御下りなされないのでしたら、御一左右(命令)次第に一分の存念を達しましょう」

大石が指示すれば、自分たちだけで討ち入るというのである。

大石は、「これは下手をすると江戸の同志の暴発となる。もともと大石は大学の処分を見るまでと言いつけてきたのだから、もう計画を延期する理由はない」と、奥野将監ら上方の幹部の制止を聞かず、江戸下向を決断した。

またここでも、その決断の背後には、もはや軍資金も底をつき始めており、これ以上の延期が実質的に不可能だったということも思われる。

旧上級藩士でもあった進藤源四郎と小山源五右衛門は、大石と遠縁であるため、すぐに脱盟の意思を表明せず、執拗に大石を思い留まらせようとし、大石も逆に説得の手紙を出したが、結局は閏8月になって離脱していった。

こうして藩政の中樞家臣グループは、既に江戸に逗留していた吉田忠左衛門と急進派に近い原惣右衛門(56歳)、そして藩主側近の用人の片岡源五右衛門(37歳)を除いて全て離脱することになった。中でも赤穂城の明け渡し時の藩内論争の最初から大石と行動を共にしていた奥野、進藤、小山の脱盟は、大石にとっては「浅野内匠頭が家来の多くによく思われていたという評判を考えていた」こともあり、残念で痛手でもあった。

(2) 神文返しによる江戸下向組の人選と江戸での居場所

前回も記したが、大石内蔵助は江戸下向にあたって、意思堅固な者だけを連れていくことにした。大石としては、奥野将監などこれまでの幹部たちと意思が同じ者たちは切り捨て、討ち入りに全てをかける同志だけでこれからは行くしかないと思腹を固めたのである。

そこで上方各地に居住する同志たちに対し、赤穂城を離れるときに提出させた神文(起請文)への連判を切り離し、それぞれに返却することによって、討ち入りの意思が確かなものかどうかを確認した。神文を提出したのは、48人とその嫡子16人の計64人、その後、京都・山科の大石宅を訪れて盟約に加わった者50人の計114人であった。

使者として遣わされたのは、これまでも大石の腹心として動いていた大高源吾(32歳)と、吉田忠左衛門の実弟・貝賀弥左衛門であった。

8月23日、大石は大高と貝賀に次のように書き送った。

その内容は、「大石が腰抜けになった風を装わせ、計画を一時棚上げするようだから、それぞれ身の振り方を考えよと話させ、それを幸いと判(花押を添えた神文)を受け取った者はそのままとし、『もう大石を頼りにしない』と腹を立てた者には江戸下向の計画を話させ、江戸へ下るよう指示する」ものであった。

この段階で120名程いた同志のうち60余名の脱盟があり、討ち入りに賭ける同志は50人程に減った。離れた者の大半は浅野家再興による再仕官に道が断たれたことにより、大石のもとから離れていった。

こうして大石とともに吉良邸討ち入りの選択をした同志の赤穂浪人は、閏8月頃(この年は8月が2回あった)からそれぞれ血縁関係にある者や比較的親しい者同士で、3人から6人ぐらいの集団で江戸へ下向し始めた。江戸へ下る旅費は一人三両と決められていた。

*付記…著者・山本博文氏は、すでに御家／藩の取り潰しで一度敗者となった赤穂浪人たちにとって、ここでの決断が再び勝者となるか、敗者のままで終わるかの分水嶺だったと記している。危険を厭わず、大石に江戸に下った者たちは勝者の道を歩み、討ち入り成功後は世間の評価を受け、数年後は大石内蔵助や原惣右衛門を始め、その遺族たちの赦免もなされ、子たちの仕官も恵まれていった。一方、討ち入りに参加しなかった旧赤穂藩士は世間から指弾され、ひっそりと生きていかなければならなかった。

江戸へ下向した者たちは、先に拠点として確保してあった吉田忠左衛門の借宅や、堀部安兵衛など江戸にいた者の借宅や長屋に身を寄せた。

大石内蔵助は、江戸の同志を安心させるため江戸へ嫡子・大石主悦(ちから、16歳)を先に江戸へ下向させた。内蔵助は、主悦が訴訟のために上方から江戸へ出て来たと触れ込み、垣見左内を名乗って借りた日本橋石町三丁目南側の小山屋弥兵衛裏店に、11月5日、その伯父の垣見五郎兵衛という替名(かえな)を使って江戸の宿所とした。討ち入り前の赤穂浪士の居所は、吉田忠左衛門の借宅のあった新麴町や吉良邸近くの本所などに14か所あった。

江戸での家賃など生活費はかなりの額で、同志たちの生活の困窮度も日に日に増していくばかりであった。なお、飯料(食費)としては1か月金2分(6万円)で計算して渡していた。同志の多くは浪人生活も1年半に及び、蓄えは食い潰し、知り合いからも借金を重ねていた赤穂の浪人は、着のみ着のままで節約しながら大石内蔵助から支給された手当てで細々と暮らしていたのである。

これら同志のうち、江戸勝手の在府／江戸在住メンバーは7人であり、大石内蔵助を始め大半のメンバーは江戸不案内であった。大江戸は良くも悪しくも広がったため、その片隅に不穏な輩が潜り込んでも目立たない人口構成が元禄の時代にはできあがっていたのである。

また一説に因れば、吉田忠左衛門の借宅・新麴六丁目の大屋喜衛門表店など4か所が新麴町に集まっていたが、ここは幕府にとって直轄とも言うべき半蔵門前の武家屋敷の近くであり、その所在を幕府サイドが全く掴んでいなかったことはないとの考えもある。従って、幕府／幕閣サイドは、赤穂浪士の動向は掴んでいたが、見て見ぬふりをしていたとも言える。

11月5日に大石内蔵助が江戸入りすると、堀部安兵衛は吉良邸近くの本所二ツ目通り林町五丁目に広い借宅を二軒借りた。ここがその後の同志たちの寄合場所となった。

ところで当時、本所は江戸のまちの新興地で雑居地区でもあった。前年の元禄14年3月、御役御免となっていた吉良上野介は同年8月19日、鍛冶橋内の屋敷を召上げられ、隅田川を越えた本所松坂町の地に新しい屋敷を建て移っていた。これに対し世間でも、これは幕府が吉良を討てと言っているようなものと噂も立った。

なお、内蔵助はこれまでの討ち入り経費を締め、「金銀請払帳」として内匠頭の正室瑤泉院の用人である落合与左衛門に送った元禄15年11月29日付の次のような書状が、落合与左衛門が書き残した「江赤見聞記」に記載してある。

「12月14日の晩、近松勘六家来の甚七という者が、内蔵助からの飛脚になり、瑤泉院様の御家来落合与左衛門の宅へ行った。これは今宵討ち入りをするので、金銀支払いの諸帳面を指し出したものである。瑤泉院様の御金千両のうち、七百両は返上し、残り三百両は、今回の経費として拝領し、いろいろと支払い、不足分の七両は内蔵助の金子を出したということだ。算用帳や、その他の書付などをすべて差し上げた。」

この書状は日付こそ11月29日だが、落合に届けられたのは討ち入り当日の12月14日の晩である。内蔵助は事前に届けると、どこで討ち入り計画が露見するかわからないので、この書状と帳面類は最後まで手元に置いていたのである。

*付記…我が川越初雁会・藤沢周平読書サロンの小説「用心棒日月抄」の場では、この箇所に関係する章を読んだ時、メンバーの岩堀さんが「芝居やドラマでは、内蔵助が討ち入り前に、その決心を秘めたまま瑤泉院に暇を告げる『南部坂の別れ』が有名な場面としてあるが、実際には内蔵助は南部坂のあった三次藩邸(現在の港区赤坂6丁目)を訪問していないのだな。」と力説していた。岩堀さんはこのこと(忠臣蔵は作り上げられた物語の要素が多分にあること)をよく口にするので、ここでは余談として付け加えておく。

(3) 江戸下向後も絶えなかった脱盟者と吉良上野介の在宅確認の情報入手

討ち入りに至るまでの脱盟者については、赤穂城明け渡しの時の籠城等の論争で早々と離れていった次席家老の大野九郎兵衛を始め、その後も節目ごとに脱盟していったものが後を絶たなか

った。そして、同志が江戸に揃った後も逃げ出す者が相次いだ。

10月20日…中田理平次／元馬廻100石、9月7日に江戸に着き麴町の借家にいたが、江戸に来てみると討ち入りなどとうてい成功しそうもないと思い始め、恐れをなして逃げ出した。

10月29日…中村清右衛門／元中級藩士100石、鈴木重八／元小姓30石、二人とも江戸暮らしが始まって間もなく、同志の中に逃亡する者がいるのを見て逃げ出した。

11月2日、小山田庄左衛門／江戸定詰の馬廻100石、小袖と金子を少々盗んで逃亡した。

11月4日、田中貞四郎／馬廻100石、内匠頭の遺骸を一関藩邸へ受け取りに行った者の一人だったが逃亡した。

12月6日、矢野伊助／5石2人扶持の足軽と瀬尾孫左衛門／大石内蔵助の家来、二人とも大石主悦に付いて10月24日に江戸へ来たもので、大石内蔵助の隠れ家の川崎・平間村の家の留守を任せたとこ退散してしまった。

12月11日、毛利小平太／大納戸役20石5人扶持、吉良邸の探索などに功績があったが、口上書を寄こして逃げ出してしまった。

以上8人が江戸まで来たのに、討ち入りを前にして脱盟していった。

こうして最後まで残ったのは47人であった。12月10日の夜、一味の者が集まったとき、次のように申し合わせたという。

「それぞれの店賃やつけの代金などは、12日までに始末をつけておけ。もし支払いのお金が不足するなら渡すということで、内蔵助の用意銀から、お金のない者へそれぞれ渡し、払っておくようにと申し含めた。」

13日の夕方、同志たちは店賃など支払ったあとの少しばかりの残金を持ち寄り、酒肴の用意をし、今生の暇乞いに盃を交わした。「死ぬのは前後するかもしれないが、来世は亡主の御前に罷り越し、御鬱憤を報じましたと、皆一緒に申し上げます」などと戯れあって酒宴に興じたという。

最後に討ち入りの成否を決めるのは、吉良上野介の在宅日を確実に掴むことにかかっていた。討ち入りに2度目はなかった。

このことについては、山本博文氏の著作を離れ、野口武彦著「花の忠臣蔵」（講談社、2015年発行）に興味をそそる箇所があるので、以下そちらに移り引用紹介したい。

大石内蔵助は吉良上野介の在宅情報の入手にあたっては、複数のルートを使って、たがいには知らない別々の人脈を通じて探索の網の目を狭めていった。

ひとりは大高源吾で、俳人でもある大高源吾は「江戸派」を興した宝井其角の一門に連なり、子葉という俳号で知られていた。俳諧と茶道は縁が深く、源吾は茶もたしなむ風流人という触れ込みで京都の富裕な呉服商脇屋新兵衛と称し、本所二ツ目に居をかまえる茶道の宗匠・山田宋偏に入門した。（*注…宋偏の偏の字の部首は正しくはぎょうにんべん）

宋偏は千利休の孫宗旦の高弟で、江戸に住んでしばしば吉良上野介邸の茶会に招かれた。大高源吾が、宋偏の所へ日夜歩みを運んで茶道を熱心に稽古して長足の進歩を示したこと、源吾の年期に入った俳人歴を知ることにより、宋偏は源吾に心を許した。

こうして宋偏を信用させた源吾は、同人から吉良邸での茶会が一度は12月6日と聞き出した。しかし、この日は事情により延期になり、今度は間違いなく年忘れの茶会が12月14日に開かれることを聞き出せた。源吾は直ちに内蔵助に通報した。

もうひとつのルートは、以前から隠密に支援してくれていた大石無人／むじん（別名：良総／よしふさ）、三平／さんぺい（別名：良穀／よしたか）父子——内蔵助の遠縁の大石一族で無人は浪人、三平は津軽家に仕えていた——から入ってきた情報である。

大石三平は当時、羽倉斎宮（はぐらいつき）と繋がりがあった。

斎宮は京都伏見稻荷の神官の子に生まれ、霊元天皇第五皇子・妙法院宮に仕えていたが、元禄13年3月、勅使大炊御門経光卿（おおいみかどつねみつきょう）に随伴して江戸下向していたが、

そのまま江戸に残り、江戸の武士たちに歌学や神道の教授を行っていた。

斎宮は教授のコネを通じて吉良邸の茶会について予定を知りうる立場にあった。斎宮が12月13日中に大石三平あてに出した急便の返書では、本文にこそ「茶会の有無は12月20日までにはしかとしたご返事はいたしかねます」とカモフラージュしているが、末尾の追伸では「あちらの催しは14日だと仄聞いたしました」と明確なメッセージを伝えてきている。

斎宮には京都の醒めた目で殿中刃傷以来の事件を眺める余裕があり、赤穂浪士たちの心事にも同情的だったのだろう。なお、斎宮はのちに「国学の四大人」の筆頭に数えられる荷田春満(かだのあずままる)の若き日の姿である。

石橋を何度も何度も叩くような執拗な慎重さで情報の精度を確かめていた内蔵助にとって、二つの情報がびたりと重なり合った。これで決行は12月14日と断が下り、連絡は江戸中の一党のアジトに行き渡った。

なお、これらのことを論じて野口武彦氏は、忠臣蔵事件には当時の名だたる文化人がそれぞれ独自の仕方でもコミットしていて、事件に文化史的な深さがそなわっていたことを感じさせられると述べている。

3. おわりに／赤穂浪士事件に対する柳沢吉保の対応力にも興味湧く

今回も焦点の絞り切れない話題提供になってしまった。それに付き合ってもらい感謝の言葉しかない。

今回の散策会の話提供者として弁解させてもらえれば、赤穂浪士事件という歴史上の事件は、今の市場経済社会の原型ができたとも言える元禄時代に起きた極めて多様で深みのある内容を持った事件でもあることを痛感せざるを得ない。そう思う時、それを捉えていく際も各人がそれぞれ自由に無手勝流で興味のあるところから切り込んでいくのが一番面白く、飽きないで自分なりに次の興味、知りたいことへの学習意欲も持続していくのではないだろうか。

いずれにしろ小生としては、当時、幕閣の中樞を担っていた老中格の柳沢吉保が、討ち入り後世間の評価が赤穂浪人側に付いてしまった、この難題を抱えた事件処理をどう裁いていったのか興味の尽きない話題もあることを付記しておきたい。

そこでは、柳沢吉保のブレインでもあった荻生徂徠が引き出した、当事件への裁きへの助言／浪士たちの切腹案の意味するところをまた勉強してみようと思っている。

川越との関係で言えば、柳沢吉保のお抱えで、やがて当代の著名な儒者／政談家になった荻生徂徠も川越に居住していたことを記した中島孝昌著「三芳野名勝図会」(校注／山野清二郎、編集発行／川越市立図書館)もある。

柳沢吉保が赤穂浪士事件のあった、この元禄期に川越藩主でもあったことは意外と知られていない気がする。ここ最近、将軍・徳川綱吉の下、文治の政治経済社会を展開すべく幕閣を担った柳沢吉保の統治者としての評価が定着しつつあると聞く。その点でも、柳沢吉保の川越での事跡を調べ出したら興味は尽きないものと思われる。

そんなこんなで、また何か寄稿できるものができたら当ホームページにお願いしようかと考えている。

以上